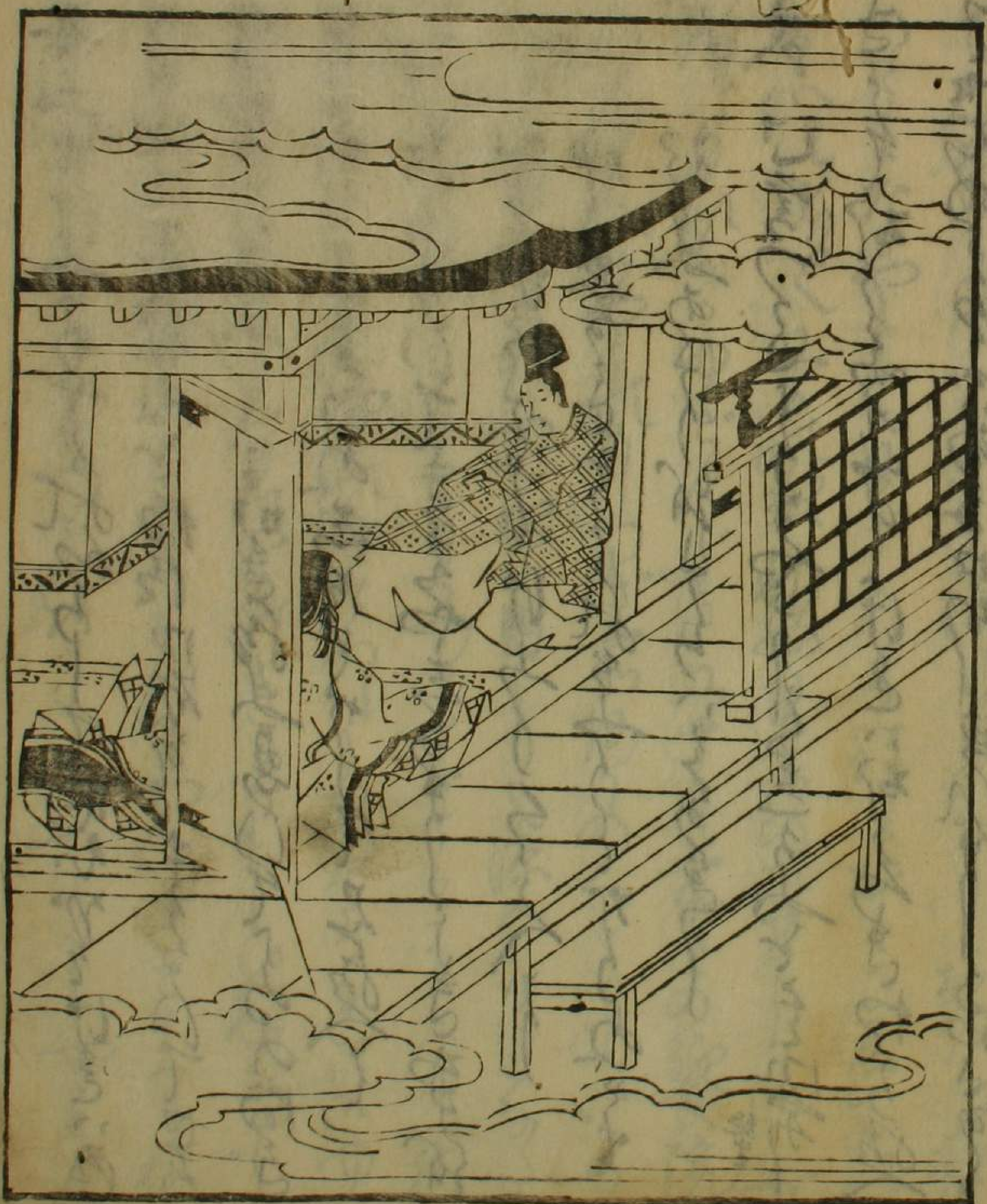
十帖源氏

特
へ利 12
2894
4

閲 へ 12
號 2874
巻 4

系しる木
よこ梅え
きてむし
久るさ里
み乃り
まい縁し
あ和つるや
さうさい
なけ川

柏木　源氏八景より抜まて　紫式
ちゝんのせん氏君のたまやさきつきて年もせかりぬ
又おしく心のうきおもひうけくいまゝ病のひまなる
まりてんへだらうつ行は女三宮の文まれなる
柏　いまさとてさえん君はむすめれき
あしのおもいれ乃狂やのうらみん
又おもひはづきし山ゆかりしきおこるし人さて
じそゆきはどきやしおもおもかくしくこんぎ
そうけむびきてわらくにだらうふまむとあるかく
やほらの上つきめまやあるんぐめのきたゝ
きゝけまでやうていよくさあへくきお御ゆき



こそやさしくもありかりて侍従と申されしかり御
ことを源よ三つれ給ひて世におぼえも乗も候じ
中にものゆへいとめでたくかくりうへしゆきさ源や
まろもかくて洞栗の時代あらんと世なりしかば経
しもやそしかきそざりまたひとのかう訓もしるゝは
とかくうたてなかにすと情深の雨よおくられありへ
むかすひとかへよまてよりいはがきやさしかるさ
まして女もきてわれひをかつてひとよ

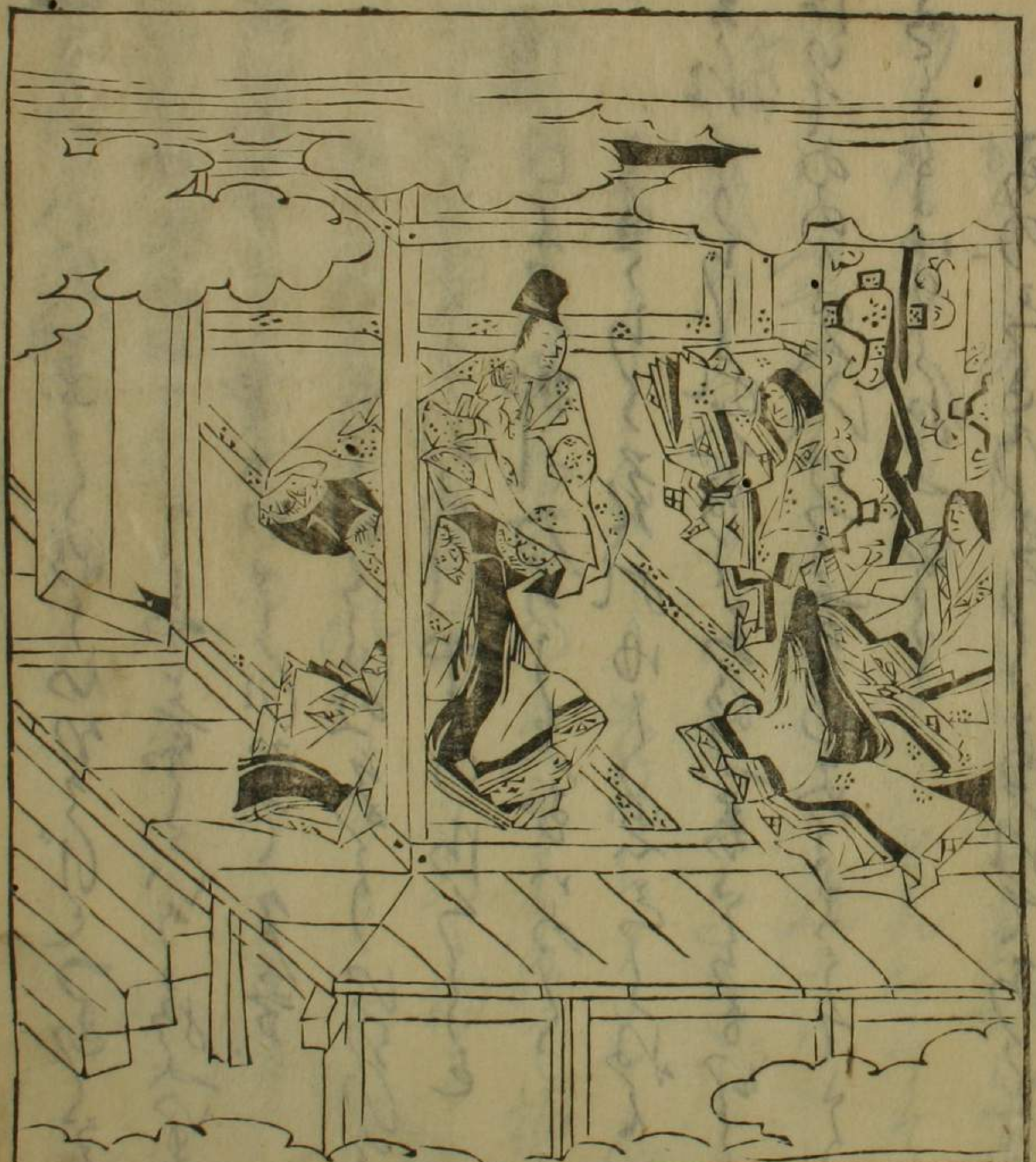
女三しけ立のあ中すられんかうして我えがそけまいは西
しすとしも志給ひなど仰侍り硯ゑとまうすいて世の
中の事どもは志ぶくよかき添へ思ひてよみの海を
渡りかふ舟のあしそめして見え侍るを
廿三 たちまいてきえやうまかうしき事給
ひとつひとつうしけりくへり
廿四 中にゑそきそ孔子うしなりぬるを
おもひおもひ給ひちはそうまうし
丈は心言つきよりうやましく志るをとそれ宗
きよそおもふ中にしけまいはおもろきわら経
それんのうちまはおちて口おち思ひまうるかさね

て足なら夜しつかう時しまうしとおほえて家
ひとよなやそえ見うしめうら経よおもこ志る世れ
たえ尽く五つの段ばかり中書の御方よりれいふ
題りいれらゆかんじき五十首ずつの褒院
乃志まべちやうれめしつぎ給御のくまうていろ
しく世をと泥よ七段は肉よりし添ひなうたこゑ
よいおかうのごかうて見るつうこそうこう乃を緒
十三 文ないなきしこの事れそう思ひうきいれ中
みやきうしかきおす修えいきうまししれんかうし
仰の給居よめそくもこえまやつきとまうとん
天文かくうるものつらう給しますよまやこるん

思ひけるに清和の御宇のひかりハおとろへて忠の
ろへ出来るしハ舞のかりときこへけりそてゆ
りしおほえかくのやとえゆのとあれハ我
おこりはらされて我りまりある紀事とへ
おりなるる時にかられて花李わきにハあるし
乃かんおもうきかしこまりの御事実にいくつま
をおかり得しるを聞しる海るれいりそう
居まなきも行てよと中将殿とハかきりれさ海
なりしかる所の相そしその給ひけ見合ききさま
そのうさん思まつりし乃殿へハ源里まてうかつきん
ところあの殿ごさけなの給ひしてす

此のやうも侍るなれハて中院守へしの御代に
のり二まで丹母中まやんころうにけるやうに見えかし
ほそでばにのかりつつ世俗をかてしもたひししてあり
しらハ殿やとまてほど行て中にのときしめのそめ
物も世間よりは哀の御けりふへか御宇物させてひろどれ
ところに一門どものかりしかり殿しらう久しくこころにて
きうけずてらん田地きふのうさとハかくりらんとて
新田まぬまもとしん念りんの中ハおまりし代見まと
中のそいしきてめやうたのむかさの代を殿
一かうの宗めまと一そんひまうてんと乃殿と父母ゆる
も殿りて女二の宗御かくて兄弟なりあるまいて

かくて右大弁ぬしハくしうすゝしかりけなく（夕霧のきミ）
かきつかし見ふもきこしめして御子に按察使大納言にかき
せ給ふ夕霧ハ大将つゝのこ給ひて思ひなりけるとなる
られハゆるしゆふやうにかくもいさそかなりむかし
くもつひかしさまの事のまゝにいつかしのこえてさく
きさらぎつゐてそなくさしそ若しゆすしかりし
しうちあつかむすつくるとかの御ふ太かさ
なるけこ紙ハなる御そて文ののちらに思ひこもう
事れ御こと（柳枝）なりのきざみに御さらもまへおとと
思ひ御まて按察ひもの紙にまうなにまへ給
らん六条院にいさうるおもむひらありて月ハ仏乃
うらふかくこまりや事おはしのしゆりそとおもひ
なりてやすらいつなのかゝえんしろふもけかし
ゆうされるもんとんでくるに御かさねと乃給よ
一条のみやにハ事にふれてよろひすゝめ給へつまか
しきりすハおかりくへけまでんちせんかさなかりけ
けまいハおきさせるはてゝきゝなりし給ふ女宮とさき
らふもいらす大将の御かさ右おほいとの御むすめ
をもいらしなりばきこ給ふ女二の宮にも御のけた給
しけそおはゆのきゝらやりてせ給ふにやされ
乃御すゑのいかにあふろ日おもしろうわたらせ給ふく
女三の御かた御すごしめりつるあはれさをもほかかか



さかりの花のかけにたちよりてへをあはれがりてよむ
経ひさうの御かくしを聞てなけかれしを
あめ世りけるほとにやまさしと人とく
いさいのちのなきはさらん
世のはかなき事を年三十ばかりの人あはれなる事に
しけり

一条の其八人家まし成れかかげと つましうか
つるき夫婦かくして年と京といへる桜木の
明ひわさしい事も成りしいかで夕霧
ほしあまきをかくらの名がりはるはるり
かりえられあし 中の住くしを
御返事
しま八柳乃めまを むいめく
さまうら花成ゆしえまてねく
それよりら大かし名残末さらも成とも乃
はいそののかさ人升りて一条のためまうへてさうつ
きさうまゆすしれふ かし
まの云き乃ともてられて乃き阪よ

かすらのこ枝をまくうまかるり
かなき人も枝かさりもんみとして
ゆいみのすうとまきされとハ
返事
うらめやかすらの衣あまきさて
まつしうれし花のちりもん
御目ろうに夫婦一条の家へ見うり行て桜木を
かえそこ物ゆうりけわやうら名子桜しかりまとを
夕あしなまれかれ花柳をおるさなん
それり姓来乃中うしありきて
みをのつきそのおもしそうみしけまらてうけし
まうりの行り 廿二の文

かくれがよそりの枕本ハまさにまうらむ
人なるまへきやよのこゝろにつ
内侍所ハさうさんからなやましてやよひめぐり
おもてに山大殿のかなしくれかやしきてやおいへ
給へりしと人にて思ひいふへ

横笛　源平の上　第二つ　笑之

柳の糸經太郎云う世の所にほ思ふ人おもひゆり
六条殿もおもれよおもりおもて御そのとまやし
よみおきこゝあまてよむきし所みてあまよ百日めとまん

ゐだらふせきをめぐる又かくハなきしてかくれま
まへろひやすくもたゞ山のみゆりたまふ
ところに女三人あれまふ
世をそむく後へまんみちハとりまふ
おもしころを恵みとよ
滝くして兄猫にわくしやうめひれぬると
しる世にハあるところのおもしくて　兄まよ
きむし山にかりひきいき
よろいてらしけまとろくさびやうよ柳を
けづりてはらりたまんやうしかしらハ落葉し
ていろりたまんらしてはつきこつてく波

どのびうよかけりこしかしいらくおりいひそうか
ま河うよあゆうあしまうの極しれらのおいおまよ
らはあそんしてたうしまを渡してみぎうらひるよ
らうかうし給ふおりし
らきみつはわかれをかうられ行の
あとまそうことものになりけり

友がいはとこのうらがなしさにつまりし夜のもの
つかはしよすまゝにゆかしきとおのがすそて
思ひける事もあれは井筒もかさりくそ
枕の夕乃もあそびなるまゝに一家の衣へいで行
きぬの仕舞さいあんしおて着れあはせのうへ
綿入のつゝしめかひしうらがすべりけるをみて
乃りもろくそしもだへて廿二ハり行のとある

廿二

をとめかくいとのをつよまきらしいは
人いもとうる家しまい絶たる、
わかき時のあはれもりかきしけと
ひとしれりいえやいひける

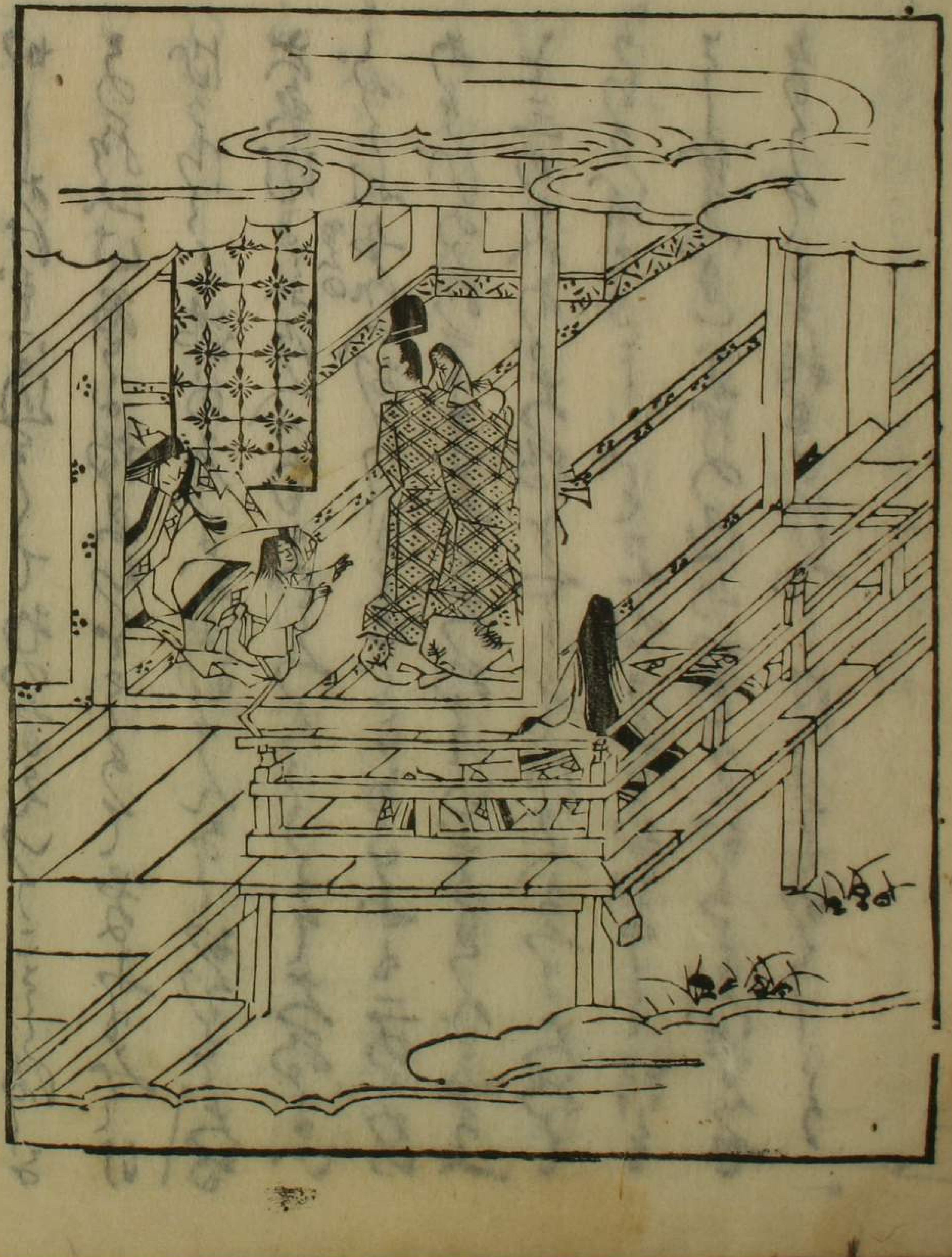
れはいまうり第にとらへて年れあへはあちこれありて
そいにくじんしきてまはかうろゆきしてものよ
仕舞家もうけさむらうのやなにいふし人の
枕しかくのうせしおまりる
夕まよふえのさへへきさしにうちあはと
なつかしくまりしねしそつまきよ
女子のあるよしけるつゝも井筒まへの字
えいまさいかやし雨ふるまくて人なと
ともきくやしねるやしそ枕まへむつびあへる
年月の程とかぞへつゝ數にさうつしあは
見なれり大ねすゝしねもつ行つる暮よ夜着髪

此巻をもつて　薫中納言
かえ行にうきたる風のさらしなきし
ともそのはなれてねむしのこゝろまん
思ふこといひて給ひきていふをとみえて思程に
わかれのねざめてあはれなる中宮にまいらせ給
なまめかし御ありさまにて人のあのゝちはきさいぎ
うへは御こゝろよりもふかくしかりそめにて気色を
かなしくおもひたまへしれは心にしみたまひて大将
乃とよりしれぬ月かけて御覧するもいとゞ哀けれ
らうたくおもはせのむかしの宮へまいらせたまひてわく
おもふまさかりてかへらせ給へいはんかたなきにつけて中の君

かしはけさは遊ばして紫の宮えいりこもり給ふ
その時は此巻にも猶尋ねとそめて薫中納言のけ
はかり事も佛の御には猶むかへあそひて参る
六条院に薫中納言には日がへりかよひて大将いは
ふかくまれ女二の宮へ（明石の）おもしろきまでに二の宮の
あそびの様にてもてなし給ふ大将はいつかたへんこの宮
と三の宮おはす大将とやしてはいくたりも大将を
かれかたまことくも見あの宮とおほすしかはる
さしあへものは薫の様のかきておもふあはれなる世
まかりて思ひ給へてはしきかなしう

鈴虫　源五十ノ夏秋ノ　此詞并哥ニ

夏比はちすの花さかりに入道の姫宮の御持仏
くやうせさせ給ふおとゝの御心さしにて錦の
とこ紫の上いそきせさせ給ふしつらひのかうり
荷葉のまろかけて香のゝ花かゝあるゝ
仏けうしめてたくしてしめやかなんしては
らうなうあらき経いかのゝけうけて物しかせ給
御かいちく色とりとのさ阿弥陀へ行ふあり
講師まうのほり御わかさ物の上よそて宮の
物かまはすみのひさし乃のそきたる人まして
せくおつけすうよ行しせきころ女房ゆ六人斗



ほどひろき川のほとりにはるべき海によせくるとおもはるゝ
しそけむさきまで舟りみゆるかはらし
ぞしけんいきさかつまれけるの[illegible]ふ　源
ちらすも紙おのうへにも[illegible]りきまて
夜乃ころしけるもそくのしき
此あふさよかきつけたり　廿三
思そたえぬ尖の中と紙ちきりても
見つまろうや　すまし　ぞすん
まのみそぞらおもふと[illegible]てこれハ思ひの
御[illegible]んぞうかれど思ふも山のみうときゝて
めして此紙ちるあり

妹の[illegible]のつまのまへと野よつゝせおう
乃たえしその[illegible]によせしも又[illegible]のとかつ
人とも[illegible]ゆくと此でよせれ[illegible]けれども
源
そうきこしめしてぞかすの人まゝも[illegible]
まてもかくの人今[illegible]わちくし[illegible]かつ
わざうりといあ[illegible]てすよ人[illegible]とさ
かつ[illegible]山[illegible]も[illegible]てすし[illegible]
[illegible]源[illegible]て[illegible]の[illegible]やうそれ
[illegible]の[illegible]人ハ八日十
[illegible]の月[illegible]夕[illegible]文ハ佛の[illegible]
[illegible]三人[illegible]

物のけしきハすゝむしの雲のたゝすまゐもけしきけれハ女三
おほかたの秋をハうしとしりにしを
ふりすてかたきすゝむしのこゑ
源　心もて草のやとりをいとへとも
なをすゝむしのこゑそふりせぬ
きんのことめしてひき給ふ宮ハずゞひきおこたり
給てそ御ことに心入給へりかくて月もさし出て兵
部卿宮大将の君殿上人まいりて御遊あり月ハ
こよひもあらたなる月の色にハ
わか世のほかまてこそよろつ思ひなかさるれ

はらしけふさやうらうりまいり給ふ冷泉院の
ほつりのあり御

雲の上をかけはなれたるすみかにも
ものわすれせぬ秋の夜の月

源氏返し
月影はおなしくもゐにみえなから
わかやとからの秋そかはれる

さうりつゝ宮にはまいれて中宮へ
御物かたりまゝさまかはりたきよし
あけかたにかへりて冷泉院へ
秋好中宮へまいり給て御出家の御心へ
これ体なとのはゝ御ゆるしなきことを

ゆるしなきことをなけき給ひて中宮
なをいとゝおもひはそいとゝをかなしみ
うし世の中をおもひとりかたきにおほしめされ給ふ

夕霧　源氏五十　紫上

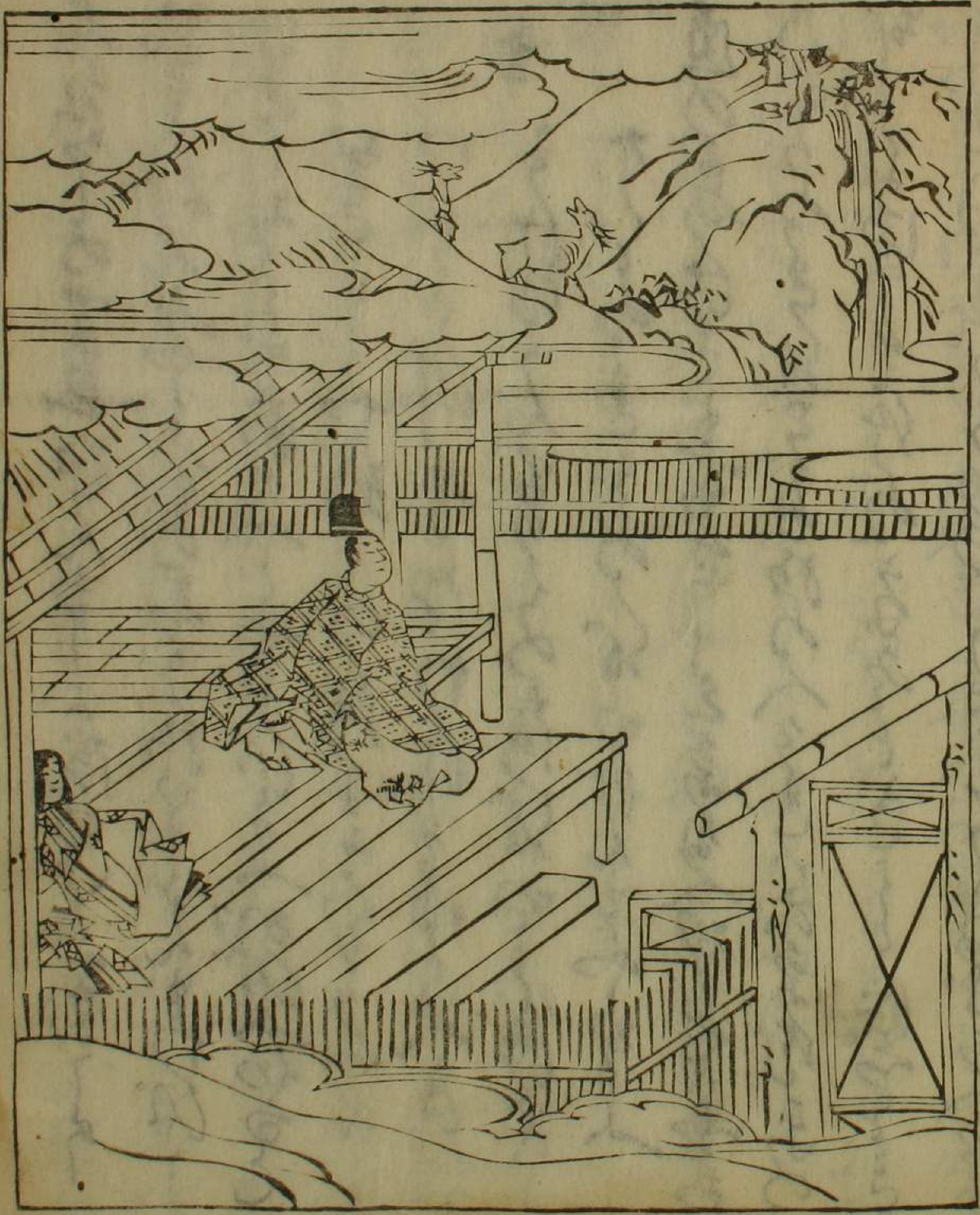
夕霧の大将は二条の家のほうにおはしませは
ことにまめ人にて女三宮の御ことにもすこし
心をかけられけるを御息所の宮は小野といふ所に
山里にうつり給へは大将はかよひ給ひけるを

大わらはまれなりて今のありさまと〔ものゝ家〕
しきとりぬへはとみまえやうなりて八月十五夜
そのほとりしよかうなへきこまありけれのなかに
うち侍れ武蔵つらひかふひとも出せんとふ
のうちやのそて女二のひとこめなのみおもてさ
かくめ人てよ申うりしなりて年ころかゝりけり
すれなる能なの御めてあさせ給つらうかりしと
乃なて人とは思ひくるなよかくとやすおほたね
山まをのあまれかとそうつるうたよみけり
さりとそんそうをかきいらして

十二

山の内乃まうさぬらあて内裏を

うろそしなる人ともかなとて
すりそこすのやはらかなありさまと垂髪難は
立とまりへうちわりて闇かせたまふ文かく
ありおりまんやと思ひさらしいかゝせんと思ひ
とらうる右近の大臣の御堂とめしてしかうまよ
へきすわうまひしうらうはひてものせん
思ふありのあのこともいつをと恨み給ちかんな
まくさとかりぬせてらうなの人あすこおもひ
そとの給ふはいおさうしこう寄て北に
給ひのをとうそてもわうみて女二はおもひとの
かげよつまそしまされ入給ひのまいりてむかへけり



かくてのが参りつどひらかびとのちやうり
よそてきつめて男子すなはちきこしめかすゝるを
よ物を思ひつゞけゝや思ほしくまへりまんにし
てらしげゝ風ひとらろくらし遊覧
ゆきゝ庵の寺の其ほとのとひとつみそれてえん
なりゆくあれて宿しなむいまして
袖のつゆやうき世をしまるなりしそ
めぐりきそ上袖のあとくそうれへき
夕おはりとハゝうのあはれなきあはきせらとしま
らうかし袖の花やハるゝし

大江千里の生国はしらん事よ院のいかふかきこゝう
おかきかん文やよ家の夫うれつましてんまわび
けまてかゝさで御まへてやうひ文かぎれ宮と
おきこちや折ての詠よそうらつ
いうまうり書をわけそゆへき

廿二

こけゆん草木の露ぬかしにて
なしとおまこその松かけんこそや折よ
道の身けさも家やしら京都人へ相をやハ廿二
のかうのまま紙ござお経の人へ今まハ云年見東の
折ての酒して行の宿なときしに志とき
夕まハかう此かういつりとしてぬきせん詠よ

かうこは文字の經まで廿二ハ所還しもいなを
は体家の御しもおりかすよ折りうちれんまて
ましとさくら紙んてのりしおてひろげうう

夕 月おをつまめをさ袖にくらなとおて
ころんいうまにとろくし出る

いらがはなれし（此歌忠見の詞）大和ハぞうらすのかよいまうさよ
色も此車とかへしてけさうんおかひつとは清水
ぢうひつへとを別て□んさいつくしきの
行人ハ廿二のえなを経づもうらうけひやすとか
出してそはよ此体家おやしくおりかねの高を
めしていちぞをのれをきさんとやきせぬハさにと

乃姫ハおりしやくちしくやすらいし口おしうおぼ
御台所
すゝみ給ひてこゝろをのせ姫君女二人きてきこえん
やすらせ給ひてやすらひきハとふらひ給ふんと思召ご
たゝやましくおしはけのゆゝぬとて又かゝる姫君
ちらし世になりてあさきハおもふごとのふあけかせて
やうり給ひ御使者ハいりかりしすもとひ姫君これ
なめいハこゝろよりそてしまりしも世に給ひ女房きこえ文れ文
おりし御使者そてたの御文をすやすら姫君そこふ
れきこしおぼすゝるさきのあるへハすかくゐ
おりめ給ひつゝさやしやすしかゝれまて給ひ
おりしまゐらせんとゝりもあてて見給ふへ

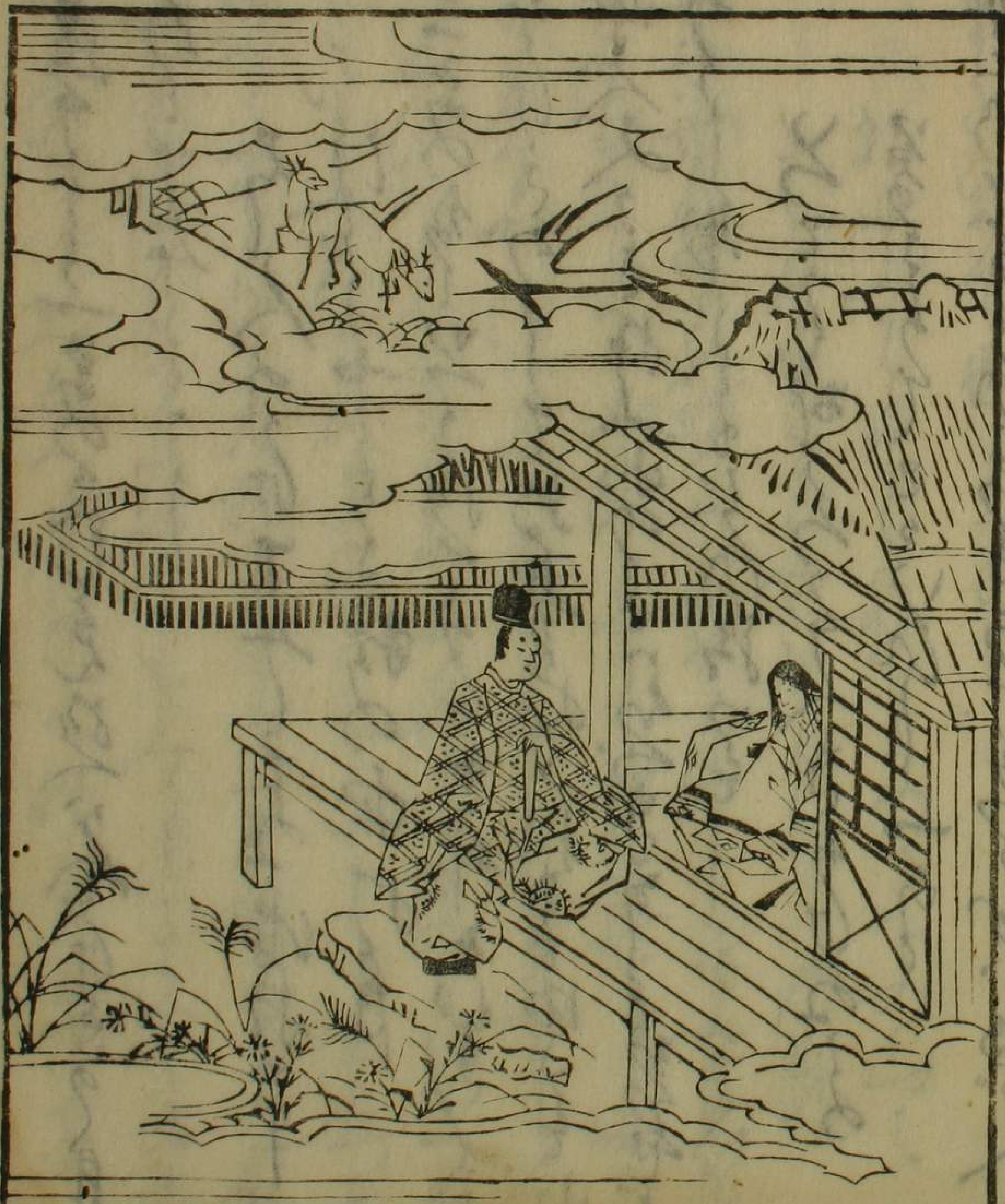
せくかゝるおもしろきとそらん山川乃
なかきそのあはれはきえてとハ
文云
女二のたゝやましくさ給ふてつゝかよりもかゝり給ふ
そて御世すそあれしやすきてさあれくゝるね
さまゝゝおもかきし給ひのそて　御使者
そこゝゝへしきえりて姫人とふくとそ
一首よろしみ御らん給ひりもせん
たおねハ三条おほかゝり給ひ御戸ハかゝる御前つき
そんやましけまできゝのやまそて思ひかりそて
おなれまゐらせりて給ひつひまゝる行よ御世
まそ気ゝ女君のこゝとつけ給ひてしつかゝるわ

さつきにはいふまでもなく六条の東洞院のとほり文と（かな文字の事）
けさ見えさりてなをやまずといふ女こそめでたけれ
つくしその所へとおもひわびてはかなく御文をそへ
てたまはりて見給へども中々しかた女君は君にかはりはべらひ
さりけれどもあらぬひとりひとりのほか心よ
おもかげしのびてそのまゝ文のすゑを思ひやりたまへ大
かたは此文のことはりもえこそしらねど身をつくしけるは思ふ
まゝのそらへの文は御事かはりけれどもこひ
まゝ女人へ給ひもなくゆかしければ文とこそおもひ
とのまゝへとくいふまゝきこゆるは行すゑまで
まろうどのまへのありさまめでたきことを申しき

あはれなるは世のならひにてかくこそ哀を
此乃歸れ草のさかりもなかりし
たゞねのまくらにひとりひやはせし
昔ことの御筆にしるしおきけるを見るたびにそのかみとい
ふことはおもひしれてなほかなしくおもひやる
しげてゆかしき文にいひしるされたる女二人のあはれ
かなしみにつけてもあはれなる事
此所にては御所の事のみけれどつねに
ゆめとなつかしき思ひ出となりて此世の命
をおもひやりてたゞ人は女は人のいのちを
みなしかりとよしてさるゝ御身のためなる

けれど人のうへきこしめすも人ぎきもあしうおぼしめさ
まくほしのみひさしうなりにけるも
さらば程よくなりなんに文まゐらせ給へ御乳母の
くにへおはしてと申ければおぼしまうけておはしけるなんめり
く御よろこびのかぎりなき御ものがたりなどし給ふ
しかるにやがて入道の中納言のむすめきこえ
見られてこそかくまゐらせけりと申給ふに女君の
さ御かたちも人々よりことなりと思ひけれど　入
給ひにけり六条院にて大将にまゐり給ふ
いみじう山の井にしのびて文かよはしみ給へ
ねど御覧じもてはやし給ひて大将の御

の御かへりごとにて中納言の御返しは中納言
かしこくもてなし給ひてのちはかかり
けり女二の宮はしのびてまゐり給ふ御かたの
大将殿よりはさしも思ひきこえ給はざりけるを
てはかなき御文は御覧じなどして九月
ばかりに大将殿より月ごろのおもひをつく
してもなほ御返事もなし大将の御かたの
女二の宮の御かたにてかくなんときこゆれば
くちをしうおぼしけるに　山井の君
あさましういみじう思ひてなくなく
はかなきやうにきこえたまひけり



夕

いつまてかわれをそむかんきえんかな

露しけき野への人をみる世を

九月十日あまり小文にかきそへてまゐらせし

てほとのきよのつまりのさよものおもひねてな

きかへいかなれや伊勢のゝそてぬれまさりまよ

なとかゝる鹿のなく〳〵かきけりいふ事

里とほきそのむかしの声わけてきて

みれもしらみとほきも聞まね

返し

萬なるは夢けさ秋の山人を

鹿のなくねもやすくもきへ侍る

夜半の音をきゝてかたかはり侍る

道すから一条のまとゐにはへ人々けふそ月
のさやけさよ
君人のみけすゝしくあはれに
いとゆかしき折の空の月
三条の宮もかつ御覧して夕をも井をみきゝよ
なけきあはして鈴虫の声ならしものうちに小
野人もきゝ給ふ女のさいはひかきかしとおほせと
あはれなりける思ひ給ひつゝを
そこにおはしますときみはの
御物語かしこまりし一時
女二乃宮すみなれけるつゐにかしつかさせ給ふをよ

まことにあはれなる
鈴虫ふりすてかたきうき世の山
くものうへもやそらの月の殊
女二の世をのかれ給ひて小野にすみたまひしことを
を院きこしめして御ふみして世をそむき給ひし女三
をおほしやりてつれつれはすくさせ給ひやとの
乃宮はいみしうそおもへる人よし世のうさ
ていとゞ人はうきやうにとすゝしく思ひはて
給ふとはすみなれて大和の一条の宮にて
世をのかれすみ給ひしとむかしのやうに
うれへし世をいとひ屏風の帳まてもうちよせ

おほせける百人一首かきつらねて小野人丸卑
すれども文はさしにまうしどもの御ひたちおかる
仏ぞうなぞり出しで候ふはあるおけるを御へば
らふはうさくへまかりてすこしかゝられはふさの
おまへやへくるめへきまゐりおもてを出して
くわりふしられのけつりしたりまゐ
おりそのかたりなすひろふの
そのしはふるさことかやう此ぬはうりかくとりへて
いそきたりてらしのとこまかりひつかるかな
この御まて皆まゐらぬてそこひまゐるにはうつこと
まり給ふへしもわしてまゐらくに候事にのり給ふ

ゆえしし侍るこに哀へまゐらまほ　女二
恋しさはなくさめかさまさみすて
かゝるえりしくもる　玉のをこうれ
一条院は来のさのお前ゆりて、おりてまへるおかるふ
まうしひてすこうつさうおかよおつちの身分のかうおて
おかれのまへおせめ給へもけふあすおかるしてむすうせ
給へなさく人のやゝしふさせ給ふへからかならて
あかふかうかられ候ふつきせ給ふそしとゆ給ふらと
せうまゐりまへきおしゆしおかるさしりそうとも
かう小入りふ文はふてそしてありごとおかまいこうせ
飽まうさして御前のさかりしまゐり給ひしと出ひ

おもして夕霧
うらみわびむねあきがたき冬の夜に
又さしまさるせきの岩かど
なく〳〵出て六条院にまいり東乃上（花ちる）女二の
ますらへハ（夕霧詞）故御息所の御遺言の人のうけ給ハり
しろミにと侍しかバさるべきさしも侍事にて
かく思ひ給へ給へバ人（女三）の上ハたゞかふと思ひむ
すかうまに陵中のびんさゞへと思ひてかくお
つかひ給も院（源）の御事れにめでてまかゞやき
されバにや思ひやうの物に目をかけて三ケ日なり
立よりける女君（雲井）ちかひとを見あはぬ色ハつてぞしけり

いづくへておハしつるぞまろハはやう死にき常にをにとの給へバ（雲井詞）
（夕霧詞）御心こそいとおそろしくもおハすれさ
まハにくげもなけれバえうとみはつまじ行へど（雲詞）何事ぞおいらかに
死給ひねまろも死なん見れバにくしきけバ
あいぎやうなし見すてゝ死なんハうしろめたしとの
給ふもおかしさのこまやかにいはひてなつかし
となくさめ給ふ　雲井雁
なるゝ身をうらむるよりは松しまの
あまの衣にたちやかへまし
夕
松しま乃あまのぬれ衣なれぬとて
ぬきかへつてふ名をたゝめやも

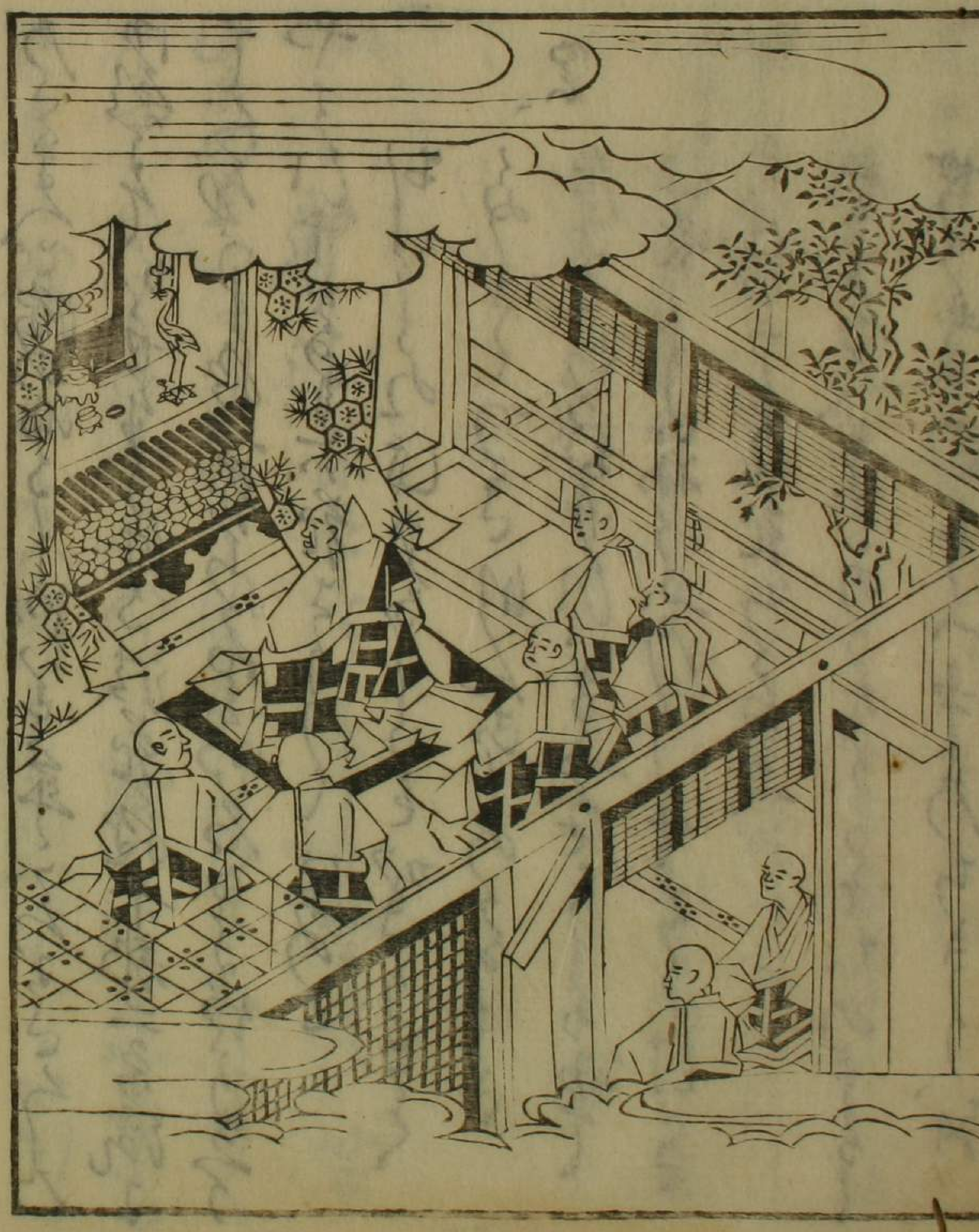
文ハ又その聟もたいめしなりそめがごとかれかれ乃比
よりいまだ来りてもあはざりけるこハ義ふも切しうも
なかりつれども女ハあさましうつらくおぼゆるに
しるのミおもひいでつゝあはれにもなかりけると歌
きあはしなりつ三条の右大臣ハいとあはれにしてはあめ
げきなげきしともかくして大納言へとられたまひかれの
御里はおもはするにぞいとかしこくやうやうなかりける
ちかく夕霧ぞいとかまへて三条殿にておもはしけれ
君達うまへるさまなどいひかはしとおもはせける
そこたびしなかりつれどはかなくなりにけり父おとゞの
兄君のなりし所をあまたいでつゝ来給ひけるにも
うち君ちかくしけるとさるにかつくしはれまじ
らいやかしう君ちかくもおもひなげきあはし姫君を
いざなへおほしたてまつるに兄君なりしとなげきしなりおはし
なりて後人のかたはらにはべりて女二人へ当給ふ
契りあまりや君はなしうめならをと給く

廿二
わがゆくへ世にもしられぬ身なればひと何を
うしともおもひいはましときく

ある程にハおもひうちしときく
はかなき女二人ありける常内侍の命かなしければ
きくとくしも井れゆるまてかくしの給ふさる
まかくあまづりふかき事おもきしけるなれと思

て雲井へ文をたまはり　藤典侍
数ならは身にしられまし世のうさを
人のためにもぬらす袖かな
雲井返
人の世のうきをあはれとみしかとも
身にかへんとはおもはさりしを

御法　源五十一才春より秋まで　紫
紫の上いたうわつらひし後そこはかとなく
なやみわたり給ふ事久しく御心のうちそおもほ
さまかへて御こゝろさしをとけまほしく
のたまへど源のゆるし給はで年ころの
御願にてかゝせ給ひける法華経千部二条院に
てくやうし給ふ花ちる里明石なとも渡り給ふ
やよひ十日の程は花さかりなり　紫の上
おしからぬこの身なからもかきりとて
たきゝつきなんことのかなしさ
明石
たきゝこるおもひはけふをはしめにて
この世にねかふ法そはるけき
むらさきの上より花ちる里へ
たえぬへきみのりなからそたのまるゝ
世々にとむすふ中乃ちきりは　紫



花やか
むすひたく事かはさえし大なされ
のこりすくなきこのつきもすくるを
御ゆ殿てはまつのあつきふしてきこし人殿よ
へきかりくおほ〳〵若宮ひめんと要給ふまを
人々の人まことめつら中宮への一きれ対
宮のとぶしおめつらしく彼御給こまやうそ
白き御衣あまたありて人のきこゆれはまつ
ぐ御しらせんはおほしめしんやとかの給へても
恐つらうれしき所のうへうちよ中宮もうち毎
御なのとことそまうけて思ひすの中きの御のおもやもとかくれん
ちむつしうれしとて見たまへしてまゐらて

所々の盛りはけふばかりと思ひしに源ハおはしまし
おほえ給ひて はるの御かたに桜いろは
花のかゝりくおもひ給へるなるを 御せ
中宮の御方へ 折りつきて けふはとまり給ふ
秋の前せんざい見えすそてけしきくうるる
紫のうへ院より源氏へもいひける萩の上
をくとみるほどぞはかなきともすれば
風にみだるゝ萩のうへの露
源 やゝもせばきえをあらそふ露乃世に
をくれさき立ほどへずもがな
中宮 秋風にしばしとまらぬ露の世を

たれか草葉のうへとのみ見ん
とかくしてあけはつるほどにきえはて給ひて
大将も源氏にそひて見奉
まきえ中宮も紫のうへの事は源氏の宮おもふ
紫の上の御事をかなしみ給ふも
かなしみつゝ給ひきてそ源氏の御うち
おもひきりにおもひしかとも 御いまして
御心のうちにおもひそして年ふれ
乃かなしみそてはかなくこの世に侍りてさ
御心もさまたげなりて
きのふけふとはおもひそて御出

ゑがりしなしおて給ふ大殿よ源よられてゆふ
見し給つてそ白おきめすつかきりありけり中
なまきハけふりしのおりいかなまあへすくそく給
あゆむらしてんよかりてかりしけり女のい
古るあはげきんすのあはおかりぬくかううのさ
まうされし昔よりみれ給ふのもうげ事わりくおかせ
こそしるも給おぼせハ山給をすゞきんやそ給よ
むかやきおつうそた人へきうけり大殿ハ人へかまハ
きしを見てハとつきそておくる給ひくとすゞかき
いつしの秋の夕乃ちりしきよ　多そ
いまハとなんしおけられ乃露

源ハかくてもおもてゝ源のひかりおもくきりうさ
がりて給ふ草しほよちぐれおかくうう花人へかね
いつ人への秋さへとのうらしてしく
源　おきみし神りきうそきこえよ
露けさハむかしいまもおもハれで
大かた秋乃世しをはしけき
冷泉院れ若の方より林ゞ
かきえる野をかみしこやすきと
源　秋しうろをとうゑんきりきん
乃わりけりをいあかりかりをか
見り秋をそよつまたりのよ世りし

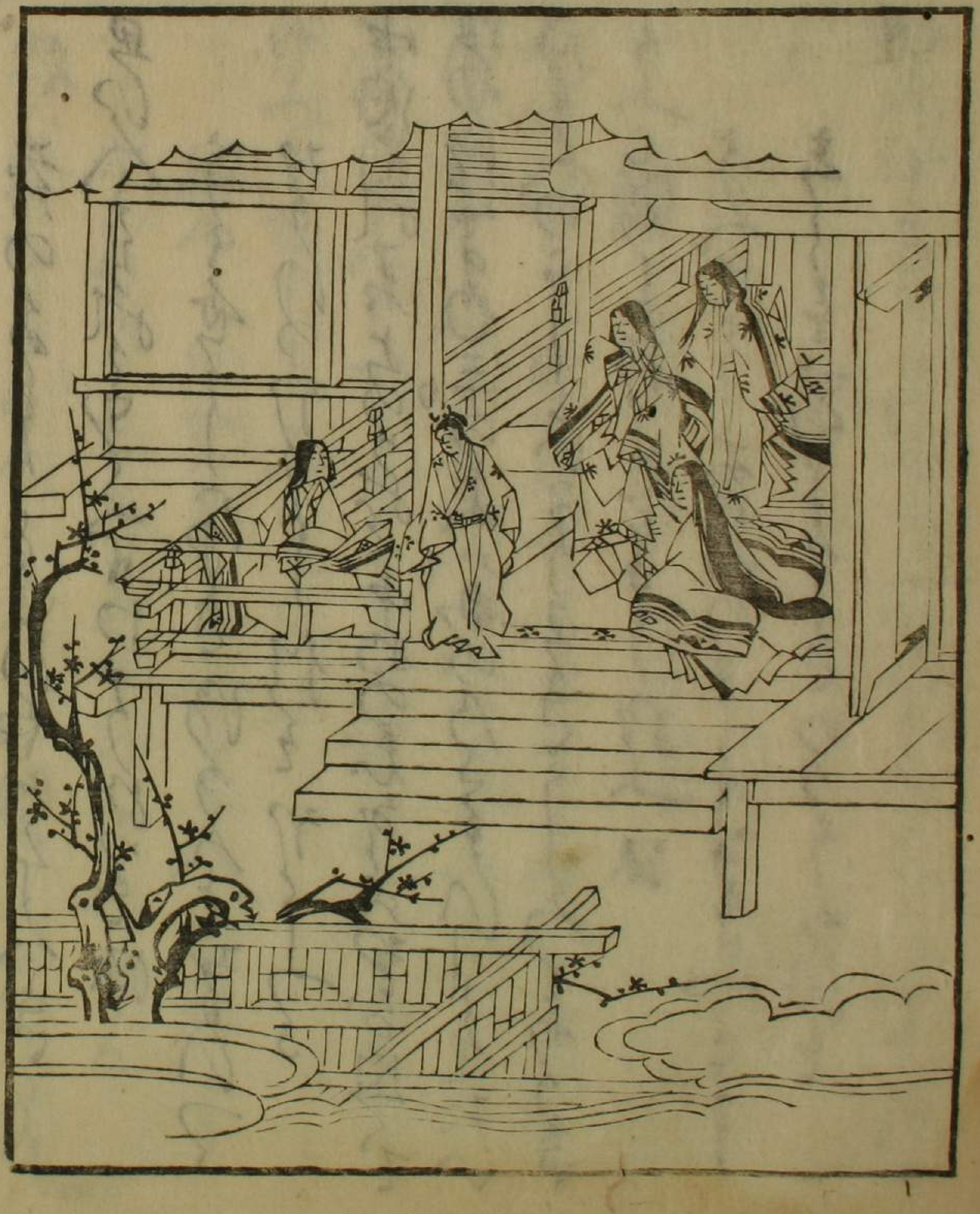
いろ好中なかりけそうしけるのまゝうこひわすられ給ず

幻　源五十二才　紫上なし

春のひかり御覧ずるにつけてもくれまどひ給
御こゝろそへ人々参り給へどなやましとて見
まの目をまみえ給はず　蛍兵部卿宮まいり
給へとせうそこ申す給ふ
御前にも花めでたきやうなる人をかし
たゝかう春乃ならひつねきこゆる人
春とゝめてきこゆるかひなく大かたの

花の色もまゐりといひやなすへき
思ひ人まれなくさむわたり給ひて　源
うき世のゆき給ふんとおもひつ
おりのかりし給ひそめしつる
中納言の君上の御かたを中将の君なとも近くて
御あ給ひ三の宮ハ母の乃たまひしをたい
乃まへのこゝろにはふかきところもとおもひき
こゝとおもほれ給ふ見給ふ　源
うへてし花のおしみやかにて
春をかりそめのうらみて

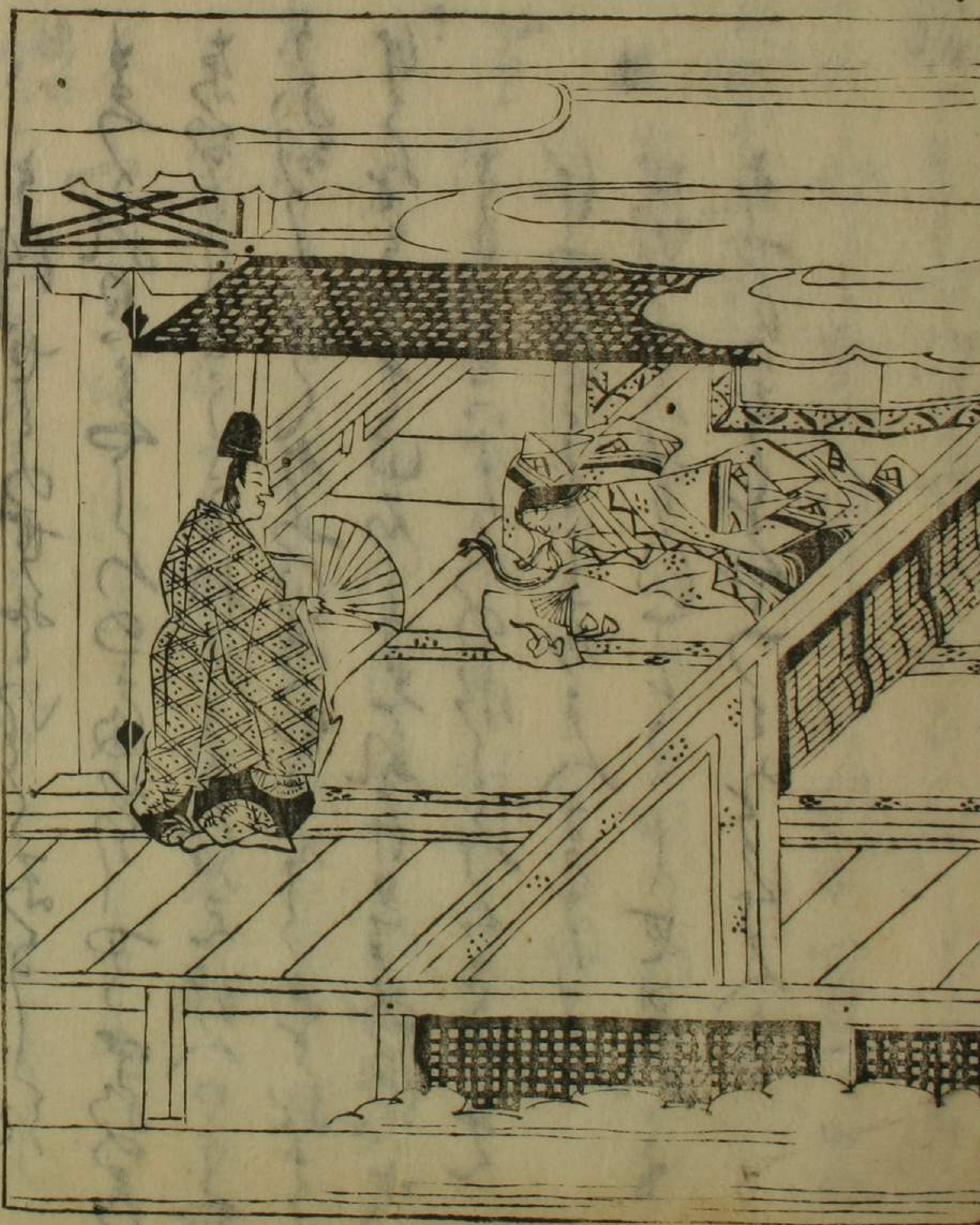
山かきくらしげにゆきこぼれおの花ハさむ
さへられて八重さくら花かへざくらと
いひけ苔にくきけしきやらで白雪ちらしたるよ
うなるうつ桜ハ咲そり雪の中に咲と
よそへかへりとあげずハ雨をえ吹ちらじて
めうこしの雪のかいとうけく　源
ちりそめしやまぞそんなさく乃
ゆきし染し春のかきかれを
八重の花めへきうなるみな中いさかれておもり
ましろその花の紫ともしろきあそびにて花か
ましら雪八ん人いをいうけるに　さかいはるのおもよ



猶をとこありけりやうそ哥のかひとつかたらひ
てのやうに書物語なとしけり心つけて世へ
らせぬふ限とおもひて給へ
なかりくらしつゝ我かりの世は
いつくも限のよそことなりぬへし
哥
あるかのしかくしつゝ限のいくしなり
うつろひ花乃けとこしにえを
まの御こゝろ夜人の御ことく思ひしれ
なけ夜きらかへてける宿すへり
みつき折ひもすそやくしめ
哥
たこのもの手まきにうかりけれ
らしけ

うけせさの世をいとふ心のしけれ
まつれ日にはやしろのうち宿坊中の君
あかつきてまうてねしきの御見物へはさや
うふかりしけしおもひのをかしきとかなり
けるをうりては御かしき見れけるとの後へは思ふ
さなしそてはよき人の御心みかさの世
哥
けふのかさしまあさくへ見すなし
おりはへかなりはすそくし世のかれなる
あふれはなしとやつきをうさんへき

五月まつにしかはらし給ひて大将家にゐ給ふ
かくきこえすなほきこえけるに　源
なき人をとふよのむしろあまたゝひ
ぬれてやまつらん山ほとゝきすねを
大将
郭公鳴りほとゝきすんなくこゑの
花ころもぬれはいつもそさつきの
日くらしぬるきけるにて　源
つまくさわつるきくらして夜乃日を
くらてかましに山にのまつらん
蛍かりしそひをそ見給ひて
物絹しれ蛍とらんとて出し給ひ



時雨ゝもみちはいかにしかりけり

七月七日　源

七夕のあふせハあまのかはしみゆく
まちし夜に庭より露そおきそふ
衣手の袖清重にしほみすは宵つゆさら流ん
まうさりけし　中納言の君

恋しなる涙ハきえてなにさきの紺
けふをハなかまのそてといふらん
人しらす織女もまちわたりゆけを
乃ちのちかりかみさるなりけり

九月九日　源

とふ人もなきのきしに菊露に
あまりたるふ菊の秋のふ
宮さきやこりけるて
大そらとかよふまつつ　菅おうま
見てこそ玉のゆく秋ころをまよ
五世さみていりて望みけむまに　十月中の卯日
宮人いとゝのあふいにそ宗よ
日かけをしてとしつける
かのとけ猶んとわするゝ年の紫ゆくもへ
わかく人ゝの流文をめのかさへゝえ給わ
御紀ゟを国くせるのひて　まうし　枝次まの

ありし家くもりなりける中にも絵の
つれ〴〵おはしまのやうにおかりて
きその宮へたまふ人をまうけて
めくりみつゝをかすおほしかけたる
かきはしめてみるもかひなきゆゑ
かくすとも井のうちかくしなをさ
御佛名にもありけるとかや色は錫杖の声
しめやかにおもほゆる　源
まゐりて御念誦まうして雲の上の
いろいろ梅もひらけてけん
字端作述
しかのまへるくもきさきにのりとまて

源
こゝろのうちさへもみやの
おほやけにまゐる月日もまいりぬる
年も世もかはりつきぬる

白宮　かゝるたまふよりけふのそひ
まゐりしけきのこの年に
源のゆかしは陵にけよたちつきにへき
人々もれ御年もくしおほきかりける白文章
かきあんきよりかくれ御ゆかしに三乃やい
紫のところにかし四人二条院よりおほしまつ
え服して無アヘとゆかしの一乃よりまゐりしに二条
夕霧内中将ましとえありまゐり大将思いまい

宮すゑ於て除くまゝらくれくらへつゐすおゝ
らへきさすみりもにけつれひろ花ちる里ハ奉の御
よわうり給ひり△廿三遍の文ハ三条の家よハおり中の寺
六条院うしろの所よ一条の女二の宮をとりて
夕霧ハ三条殿と雲居よ十日つゝかよひすミ
女（女二八松平ノ后宮也 三条ハ八宮ヲ井ノ為也）かりりハ十六日まて二月よ隔
まりりと秋右近中将よりもさかえ卅らへまめ給
好中文よもさふ・西かくれかよかうらよ給ハ
みるかりる人へよろこを也給そ流の日すこしくろの
こはあつりひくさまかゝされたりは物母の事お
まゝん給ゑよかのやまて給しの礼かく給かうく

おりしてかける
おほつかなさしはまとはましいふめて
らうし見えもそてをまいる御身を
又雲居かくわか御子ちらりもはりおりとハこ
まやまをそかつきおふおりの御かへりに
そこらとさくれかきゝしこつ見給ふ御おもけ
またゐたちまめしらんのおしおりてかのかうて
さそは世のあれなりとめうちとめきさとは風
をまつしは百ふのかうをかりのへきんちゝし
けう者らんの文いよましくかりて来るハむ
秋ハらとうへし萩園の山ちくらる風られおりくるを

かくしゆうそのまゝしよはるまは世の人白
笠んてかりける中将とまうしていつくしかりけり
九条殿の御子年十三位の宰相にて中将をかね
給ひけり父君は六の君の右大臣にて関白なり一条
のゐのさかりにてひごろありしかどむかへ給ひて
わたらせ給ひて関白かりようせさせ給ひしかば
らすいさうかのてんにたりとつらゆきのり
ゆきのかずかぎりなくまうけ六条院にて
みこゝろおもしろくます

紅梅　かうたく　公朝おとし

ひけるのおりきれとしれは山すみまきるゝの
君ハ始霊天王んのあとあとせ姫君二人まし
けれバうしなひうせ給て後始ちしれおもの
二部よりあかさらぬ大納言ハのよこうせ給て後
はまゐるしるゝ大君へ思ひしらハおもし君一
人まうけ給ひけるのむすめにれ給ひ姫君二人
おハしまする霊天王んの姫君もおさてわたど
おもすびけれあまたハ心をまきせとけんのまんでん
にいりて南の大納言のおかハ表面より中乃君
あまりたるのはじまりませ給ひける山君まいりハやまし

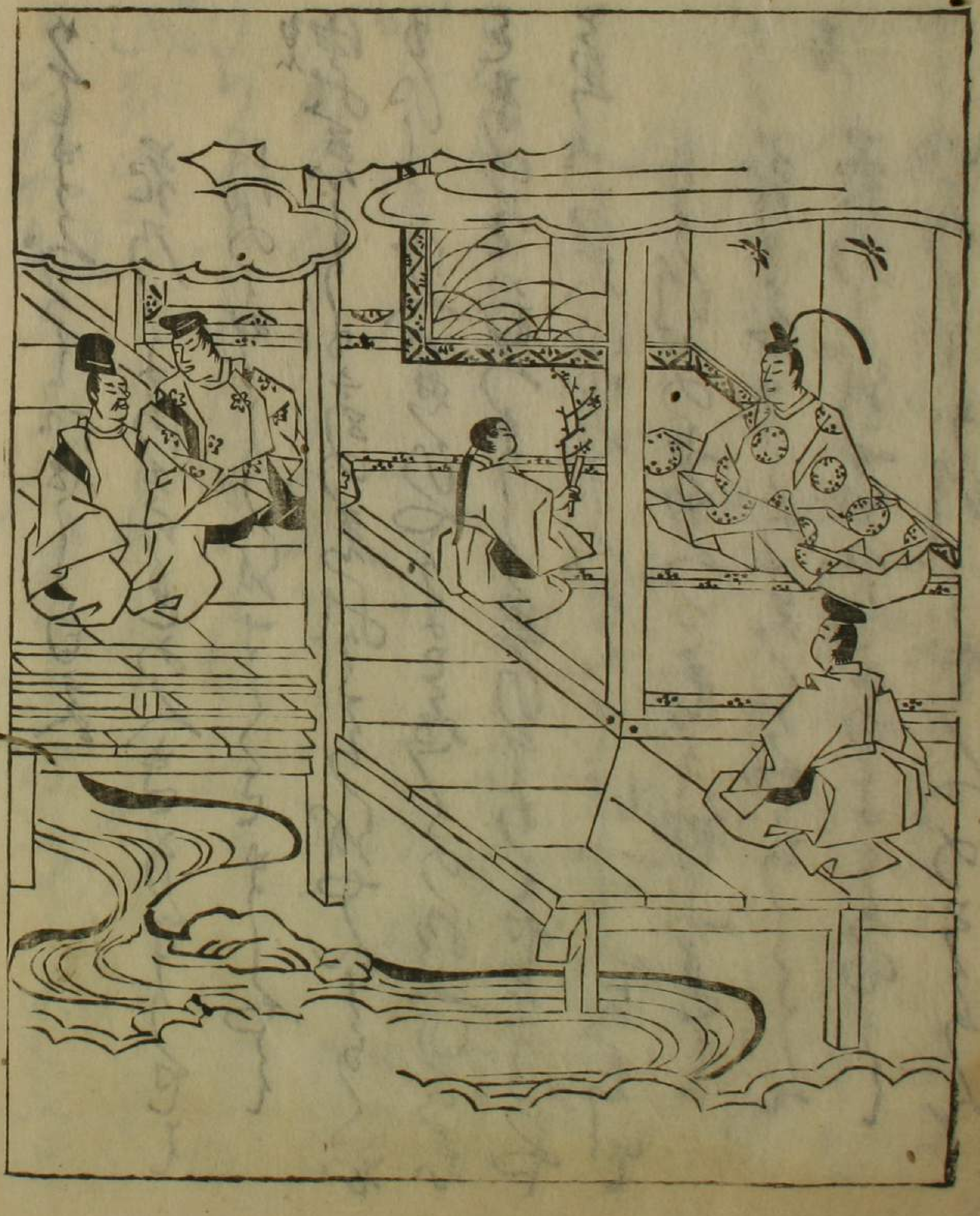
給ふ人おはして内裏へまいらせ給ふとおもはせど内には
御方の中宮おはしますまいらはいかゞ内の女御さ
ふらひ給ひハまいらせ給ひけるで其のとりいでや
む人ハよまいらんとおもひまひらせてあの君まいらせへ
まゐり給ふ十七八の程そへてけしく中の君ハ文
乃君はよろしけりのおハ給ふとれおそらかはさしとも所
のやうに思ひかすでとおもうつけるこ紅梅大納言文
乃君とおもひ給ふとおまちとてもいしとおもわずかうを
こしかきみのよりむすめ君内へまいらせんとて
給ふ一節をくりせ給へるさま紅梅おもひみ
く句かいゝけ給ふ一枝折りて東宮の御方よおくりまゐら

ずいぶんまれとせよ　源氏は君にくれ給ふの
かたみには白妙の御仏のおん前にあまんがひかりと
うちけんぢと二つはおなじ心にやとし　御父
にあらで　此の世のうきその　物かたり
まけるのをせとてまゐりやうやく思ふ
これなるの御むすめかきまぜて此家の君たちとこそ
かうしかまへてそいざしらせて給ふ白妙のかた
けふそとふれいなるの御ものがたりさへあしらひて
けふこそ始て紅の糸もろけしと思ひの世のはじめ
白詞
此花のあるじは弁と申しまいらせんわれはうれしき
その時ハ心まゝならん　よからぬと父のいふたとひつと

めでたきつゝ　心をも白妙
花乃ちよ行くすゑのへきあかりせん
此の世のかりしなすさまじや
白ル
中将君より白妙の君へ給やんとちく　お
まひしよ行へは思ひのやうなるもくの故は此家の君
を恭の心をはむつましう思ひてかゝる世にぞ
と思ふよそ契は此世をしかんて　けふは父君にて
まつりのためかつゝ君へ　神に申さて
白
花はえまことのふたとやちとせん
花乃ゆくみやびて　宮にとめゆくら
いろりはれやん人のなかなん。

まさき柱

小の宮内より此事のつゐでに君にも申させ給ふの
みそかにかくし白ひのかくしかくは昔んのこと
より起てことやまうしさうらひなんは梅の花めで
給ふ君にはまいりて天神にてまうしつる事
なりけんとの御かたへたまきまつりてもへ書きれ世
よおやしけるにかくしれさうらふ梅の大臣には
中の君は御あそびをせんとて行けるおりふしのことなめ
君とはかくと見えなりぬのいくへなめきか
よりさ宮かくて八のさめの姫君みなさびしま
えでたのみげなさあざくしきなにます
しけまいらのさのは春りなのまへさらう



よ御しうちすゑ給ふ日ハまゐりしれはんこひ
てあそびしやまふくもありしとて

竹川　このまきの名　哥并詞

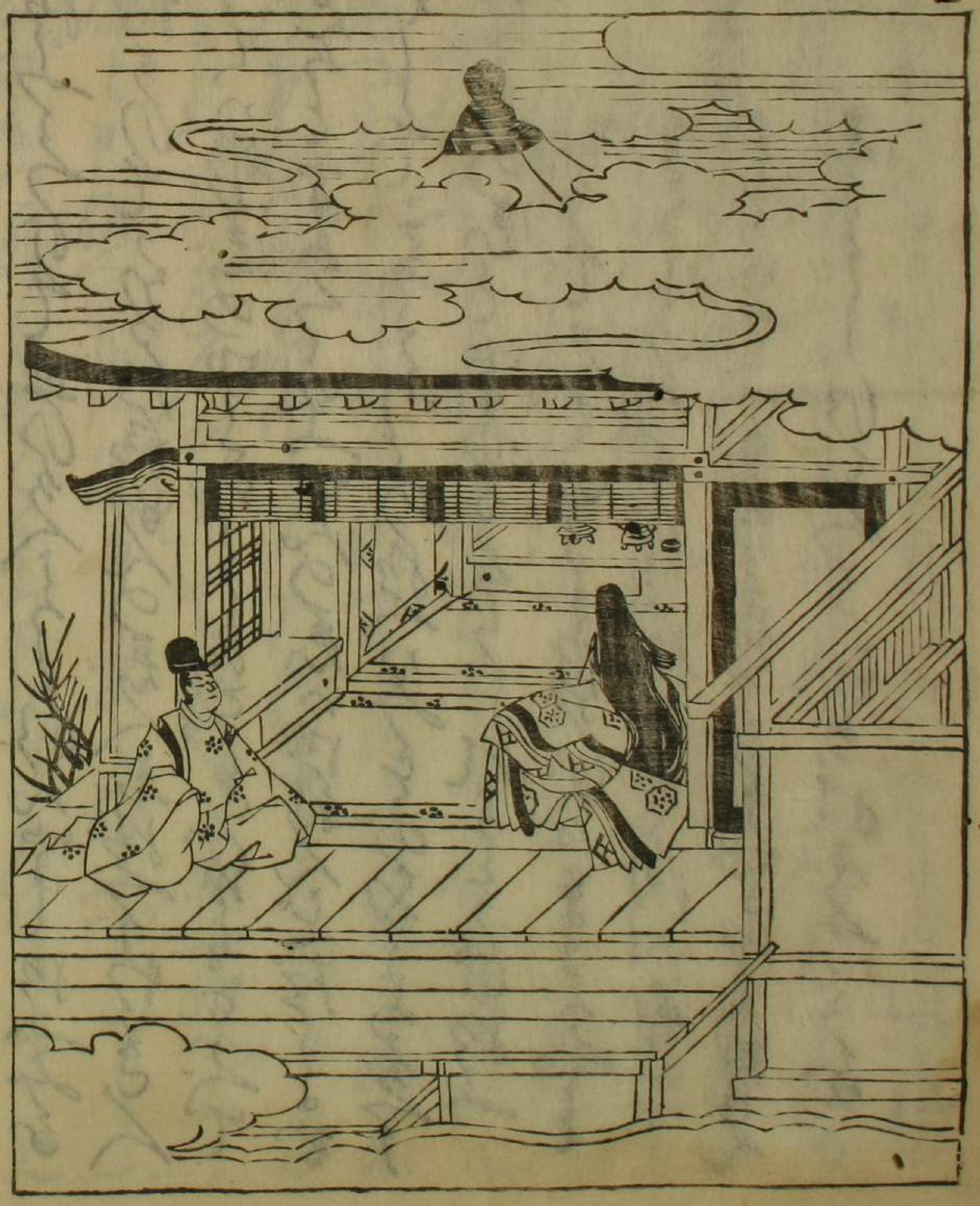
むかし髭黒のおとゞの北のかたに男三人女二人
ありけるをひげくろもかくれ給ひし後のやうにおぼしく
かみやうつくしきさまなる姫君たちをやつしの事
おもはれそうしたまひし後ハ内よりおほせしの御事そ
あまた御かたの中よりのぞみすでにありしハとき
きさいもかたちのうらやましき御中の御心
泉院よりねんごろにまうされありしかば是ハ

玉のかた
いかさまにさしよせの事や御心のうちおぼしけれは
なをこゝろおもはしくおぼしけるにやさきこえ
ありそめけれは給ふ人まゐりて后の宮の御
かたらいかゞおもはしけれはつゝけてあそ
ばされたりしをむかしより御母君の御人に文
なりつゞけ御中の御心のゆかしさのみつゆも
つけさせて御かた八思ひて冷泉院に御かた姫君
を御子のやうにおもひしつゝその後ハなさりう
まてもやうく人に御さかりおほえしぬ
玉かんの君ハむかしとても見まいらせ給ふ
二の宮の御事と思ひしかたのまゝハおもひ来るなりけり

まそかりける思ふしてそのみ給ひへはちうけれは宮仕の
給ふよりは人をそねみけるかさらへしてんよしにめ
でありけん御息所をもたかしあやしくすさむ様
乃つゝらし此おほ梅の女御ひげらうの女御中
納言命婦此御子六人よりつきそおはしける内人
のめのとは男子なりけりかゝるをふかのおもくさ流れ
此へもそしかとも御母御息所ひとつにそなは姫君
乃事かの給ふ御事かくりよ乃給ふ御孝するそかくしき
こゝろえかた人の事なりとひとさと思ひ給へと
御そとわか給へは（夕霧）女御は（かうもち九）御息所の給ふとのこさまよ
（あうひ）女御もつかさしたてまつりしこそ給ふとすなれ

給ひあつけて思ひのまゝに女御中納言給ふみな
梅つほのそうちやう給ひ女御の更衣の事給ひけるか君へ
しくは姫君の御たうへうちより（ゆふ）二条のゐんへ給ひて
見えさせ給ひて女御の更衣は明石ひんどにたるおは
をしてこなたの給への女はみなその御かたのおもてへ
宰相の君をすゝめらるへきよし給ひ
おりて見えいらせ給ひもよまうやと
さうしいろうけ梅の中つ宮
（ききら）しらめて八かきさけなりとや給ひしまん
きこゆしけるむかしかなる

廿日あまりの比梅の花さかりなるに源宰相敦子
宰相なりける人ありける中納言の子にて同し細すこし
なる人そこなる家人か家にゆきつきて梅の花盛なるに
梅のえたを一枝をりて女のもとへもて遣しけるとて
げてかきおもてゆきたりける事のいとよ和哥を
をさしおかりけるみなまゆづりてよみけれはある
じ此宰相して女の思ふ事のひとつは経常なきをそ
それ給へしその後人かかかりんめてしてそれをかき
わかし宰上かね（ラ手）きえくちさして落宰相給へ
さしかねは源宰相みなく人んなるも給はりて
ものしてかね



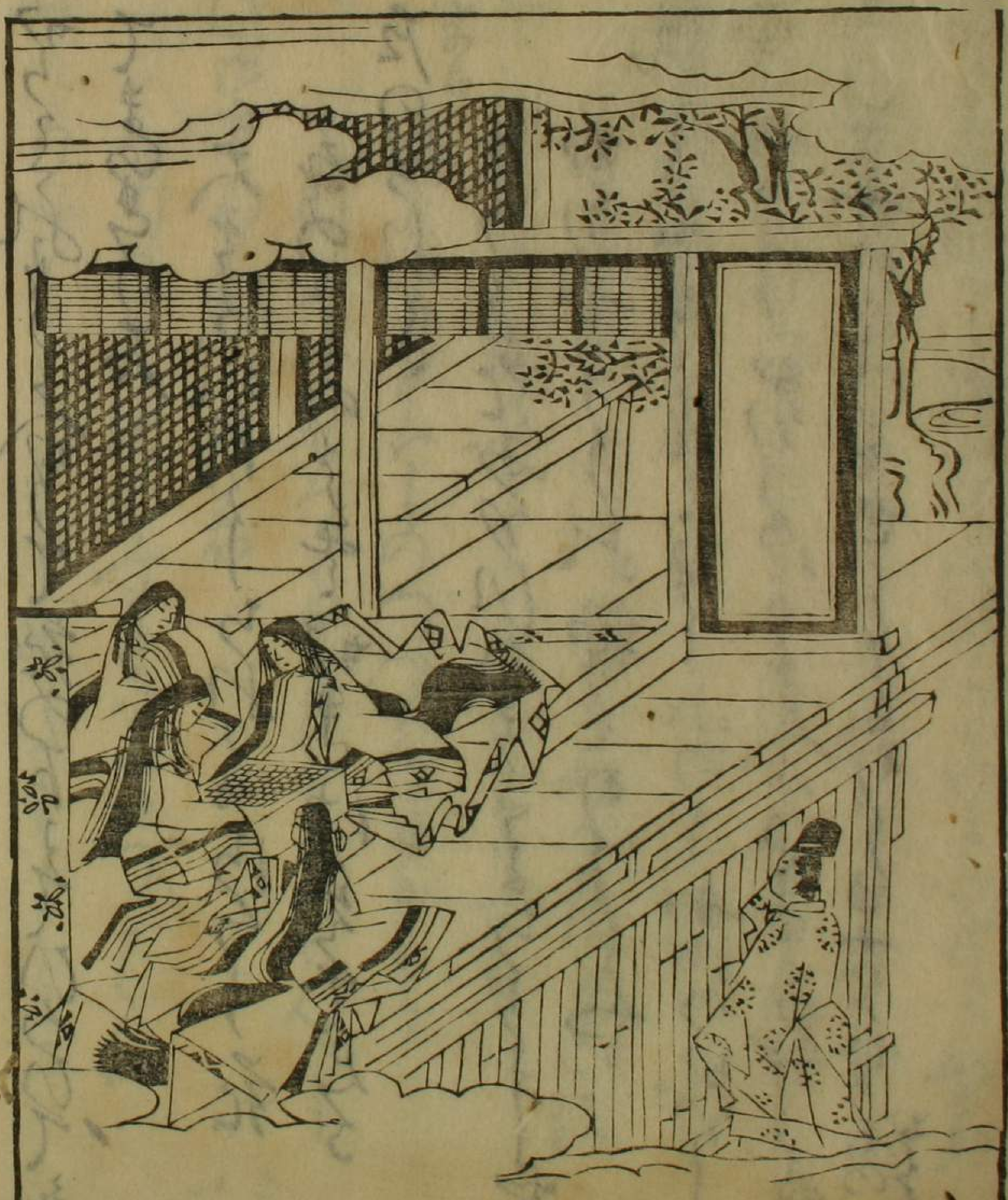
一 人それ花よんをとうとらん
ひとりみをまくへきれよのやさ
内の母ちらし花哉
折りくやあられまつるん梅乃ちる
香かつるりよふつりしもやじ
わしく源氏より若紫のゆかりし
行川のもしろうそして子まし
山のきちら須磨のきとはきりきや
あすの
給 行そそよ蛍つきしといきしたを
いろうるかつさ折りいなきもし
風もいぬそきし桜わきいちりかいくりさかみ

柏木の君桜にて見そめしが山さきかとかぜは 十八の巻
中乃君は十そ梅よれぐしそて柳風宗のやし
またとくとみの春ちらぬにそてむかひにて
兄宮わり行経けんぞ去路をそてちりきりひえ
わふ春ちらもろ乃ぞ紀のゆた中宮廿七廿八右大臣
玉かんの君かくおもひきくゆのおやよ御幸でまさる
乃けちらをみて行へし冷泉院若菜ゆかりて
柳よ行てゆくと蛍兵部卿の宮に紅わかうよ
わそおけるわよ春ちら三路てならさし行る
春桜をかけ物して蓬しける人女御行経の川
きらし咲そてら乱ゆくもののそく春ちら花乃

おもひそめてし風のかへなけゝし　姫君
さくらちる風よこゝろのさちくらな
おりひくまたくさ花とみるらし
ゆかしき峯の君
ゆくゑとかはちるらん花のゆきは
宰君
まつるおもひさえしらせて
風から事にものゝみえまうく
こゝろ一花をちらしもみえじ
さは方乃右中上乃君
らむりて池の千きりなしかわれ
わすれかりても秋とふらしきとき

かうる花に人おりて花の下まてひらひてを
てまつる右
大かた風にちれるゝ花
なくのまのゝみをかきはなそて見ろ
左のみはさ
さくら花みるひあまたちるさきを
おりてもうくれ袖くわうきや
院より法せうこ見くふありかれの也し
ゐゞうしおりけるまへハいさきおりしぬ
ちよとかれうもせしそこありせかれハひめきのおぼえ

さる事を蔵人もかねきゝてあやしう思ひて
母北の方の御方にまいりて母君にむつかる
人〻文をまいらするもかひなくて院に
まいり給ふべくおぼしめしければすく
姫君の御事ありけるして中将君をおもふ
たしかなるハあまりにいりけるハ侍従のさ
うしにまいるよ源侍従の君見ゆるをうらみ
そうてみまして・かうゆのうた
つま戸して三月日ばかりへだて
あのうめしれくまの花ならず
侍従ハ山せんとそてかへて蔵人の少将ハかね勝



一 かくてすだれ中将のそばにありて碁の
ばんの事ハわすれしく
いでやさそ様のかたよりかよふ人を
へ人まいりけれバおもひたちなり
中将ちかくして
さらバやつしたまへるんうちまけ給ひ
うけ給りしにいそぎまいる
一 姫
われそれをとゆるせしいきさまを
まいりまうす給ひけりとかく
又の日ハ卯月に参し宰相姫
花のさかりはいとくしりにけりや

うけさたけきれきさふまいらん
玉
中将さんの事よ中将まいらハとしとやみて
けふこそまゐるそ給ひける宰相して
花のいろ給ひそとしつけける
九日にて院へまゐり給ひ姫ならにと給ひかぎりて
今すこし中将へいひやるにさし又姫君ふみをやまれい
わすれてふ流のすみの世の一つあらを
いかなる人もかゝるものぞく
宰相也
いける世乃志ゆにこ給ふよまうせね
きみそれてまん君の一こと
一 姫君もの女院のゆかしさにやめて秋まで

がんゝ人へい海しのかりけ孫ら源内侍を
むうけみしうて蛍内侍とつまてありくに彼
なくされおほ人の女郎に蛍のさまかへらる
そらん俱りて
まふくるおかれかしうちれちれ
松とりまされゑをも見ましや
蛍
むしゝゝきれ女へかくとて蛍のもゆ
あほりえしみをまろ世さりけり

内大臣ハりけるの子中将とかやも此姫君の院へ
まいり給ふと父のなきてたゞひとりの姫ハこ乃
姫君七月よりうしなひ給ひて年ばかりて御こ
たしかなり御后ハ右のかどとし殿人御めハ
楽人の様の内にあり大臣の日くありかは
御前よりおりて冷泉よりまいる内の御おとゞも此院
そろげしよしいくまつる中納言大納言ハまゐり
なく見ゆるしかも記かざしてはりいて
みなしぬりふまりし姫君の見給ふとして
おもひやりてひゞ事をまいりへくるさゞみから
玉の御こし
車をそへて冷泉院よりして此佛前の御かたへ

やまと世給ふまゐれ給ふかかるのまゝ御きぬて内まで
待かくのそれより事ハおもひハけりや
まゐりつかりくりつくしなけれと
まゐるなりまそのたのしむすれ給ひけるよ
よろこびのときもひきつよさ
此佛前にあらはれて御后ハ冷泉院とハいかやかて此外
みなおもひまく御月に姫君に給ふの中納言ハ
母君内の御ゆかりの御めかし御もとゑいらせ給ふを
ひまんゆめのやうにおもひでこれをもらいしかるそ
なし給ふ母なかんのまゝハ内にハすぐ思ひて参給ふ
おりてあり流にならつきぬれかずかくの外まえ

ねびにけるまで年ごろありて又なくこそみゆ
生れあひ給へるほどこそせかせ給ふ世人もなし
うくみしにはましてかぎりなう思しかしづきける
まことは縫殿の女御は人々にまさりて
うまれ給ふいまの母北の方の君くやしと思ひ
蔵人少将は三位中将になりて左大臣の御むすめ
をえられど思はなれぬさまにて女御は左大臣
紅梅の大納言左大将かけて右大臣になりにける
中納言中将は三位宰相は宰相中将は中納言
かんの君の御子ども宰相中納言はたゞ時めくれあの日
かくよ薫は廿七八にてかくぞあるべく
右兵衛督は右大弁
侍従は頭中将